

熊取町埋蔵文化財調査報告第4集

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅱ



1988年 3月

熊取町教育委員会

は し が き

現在熊取町には、周知の遺跡が34箇所あります。

この数字が物語るように、私たちの祖先はこの肥沃な土地を基盤として営々と土地を開墾し、産業をおこし、また文化を築き上げながら地域を発展させてきました。

しかし近年の高度経済成長に伴い、宅地開発等が盛んに行われ、都市化が進み、歴史を正しく理解していく上で欠くことのできない埋蔵文化財にあってはこの影響を強く受け、多くの遺跡・遺構が破壊の恐れに直面しているといえます。

このような状況のなか、本町教育委員会では、開発申請者等のご理解、ご協力を得て、発掘調査或は工事計画地での立会、試掘調査等を実施し、国民の共有財産である埋蔵文化財の実態の把握と保存に努めています。

本書は、これらの事業の中で、昭和62年度中に国庫補助を受けて実施した調査成果を概要報告書としてまとめ、発刊したものであります。ごくささやかではありますが、周辺地域史研究の為の資料となり、わずかでも文化財保護啓蒙に寄与できますればと念願するものであります。

最後に現地での調査及び本書の作成にあたってご尽力、ご教示をいただきました方々、並びに関係各位に対し感謝の意を表します。

昭和63年3月

熊取町教育委員会

教育長 原 治 平

例 言

1. 本書は熊取町教育委員会が昭和62年度国庫補助事業（国庫補助率50%，府補助率25%，町負担率25%）として計画し、町史編さん室が担当・実施した熊取町遺跡群の調査概要報告書である。
また、本書には前年度末に調査を実施した降井家屋敷跡86年 1区の調査の概要も併せて掲載した。
2. 調査は熊取町教育委員会発掘調査嘱託員井田匡を担当者として昭和62年4月1日に着手し、昭和63年3月31日終了した。
なお、調査における事務、連絡等は町史編さん室室長口原進、事務吏員根来光恵がおこなった。
3. 調査の実施と整理にあたっては小橋秀行、金納圭吾、澤雅樹、二反田茂樹、久世公一、西野徹、成川憲明、渡辺由美子、根来公恵、富村伊都子、新居田美紀、二反田美幸、辻本栄子の諸氏の協力と援助を受けた。
更に広瀬和雄、佐久間貴士、坪之内徹の各氏より有益な助言を得た。また、土地所有者及び関係各位から多大な協力を得た。明記して感謝の意を表したい。
4. 本書中の標高は東京湾平均海水面を基準とし、方位は地図以外は磁北を示すものとした。
5. 本書の執筆は井田の他、遺物については一部の調査参加者がおこない、井田が編集した。執筆分担は本文最後に付記した。
6. 調査にあたっては写真・実測図等の記録を作成するとともにカラスライドを作成した。広く利用されることを望む。

目 次

第 1 章	はじめに	1
第 2 章	東円寺跡の調査	
第 1 節	東円寺跡87年 -1 区の調査	
I	位置と環境	3
II	調査の方法と地区の名称	4
III	遺構と遺物	4
IV	出土遺物	11
V	出土瓦	15
VI	小 結	19
第 2 節	東円寺跡87年—4 区の調査	20
第 3 章	降井家屋敷跡86年—1 区の調査	
第 1 節	調査の沿革	21
第 2 節	出土遺物	22
第 4 章	その他の調査	
第 1 節	大浦中世墓地87年—1 区の調査	29
第 2 節	久保城跡の調査	29
第 5 章	ま と め	30

図 版 目 次

図版第 1	東円寺跡87年 1 区・2 区遺構検出状態 (1)
図版第 2	東円寺跡87年—1 区・2 区遺構検出状態 (2)
図版第 3	東円寺跡87年—1 区・2 区遺構検出状態 (3)
図版第 4	東円寺跡87年 -1 区・2 区出土遺物 (1)
図版第 5	東円寺跡87年—1 区出土遺物 (2)
図版第 6	降井家屋敷跡86年—1 区出土遺物 (1)
図版第 7	降井家屋敷跡86年—1 区出土遺物 (2)
図版第 8	降井家屋敷跡86年—1 区出土遺物 (3)

挿 図 目 次

第 1 図	熊取町の位置	1
-------	--------	---

第 2 図	東円寺跡調査位置図	3
第 3 図	東円寺跡87年—1区・2区調査地区割り図	4
第 4 図	土壇墓ST—1平面及び断面図	6
第 5 図	東円寺跡87年—1区溝SD—1石溜り平面図	7
第 6 図	東円寺跡87年—1区・2区土層模式図	8
第 7 図	東円寺跡87年—1区・2区平面図	9
第 8 図	東円寺跡87年—1区SX—1出土遺物(1)	11
第 9 図	東円寺跡87年—1区SX—1出土遺物(2)	12
第 10 図	土壇墓ST—1出土遺物(1)	13
第 11 図	土壇墓ST—1出土遺物(2)	13
第 12 図	東円寺跡87年—1区出土遺物	14
第 13 図	溝SD—1出土瓦	15
第 14 図	東円寺跡87年—1区出土瓦(1)	16
第 15 図	東円寺跡87年—1区出土瓦(2)	17
第 16 図	東円寺跡87年—4区土層図	20
第 17 図	降井家屋敷跡調査地位置図	21
第 18 図	降井家屋敷跡86年—1区土層模式図	21
第 19 図	降井家屋敷跡86年—1区出土遺物(1)	23
第 20 図	降井家屋敷跡86年—1区出土遺物(2)	24
第 21 図	降井家屋敷跡86年—1区出土瓦(1)	25
第 22 図	降井家屋敷跡86年—1区出土瓦(2)	26
第 23 図	降井家屋敷跡86年—1区出土瓦(3)	28
第 24 図	大浦中世墓地調査地位置図	29
第 25 図	久保城跡調査地位置図	29
第 26 図	中家住宅及び降井家屋敷周辺小字名図	39
第 27 図	熊取町遺跡分布図	43

表 目 次

第 1 表	昭和62年調査地一覧表	2
第 2 表	東円寺跡87年—1区出土遺物観察表	32
第 3 表	降井家屋敷跡86年—1区出土遺物観察表	34
第 4 表	熊取町内周知の遺跡一覧表	41

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅱ

第1章 はじめに

熊取町では、文化財保護法第57条の2、3第1項による発掘届、及び発掘通知は年々増加の傾向にあり、特に本年度は大阪外環状線に面した地区での店舗等の建築がめだって多い。また、人口の増加に伴った宅地の開発や区画整理、河川改修、道路新設、公共施設の建設なども増加の一途をたどるばかりである。

このような状況を反映してか、発掘届・発掘通知の届出件数は44件に及び、そのうち、立会・試掘調査は34件、発掘調査は10件実施した。

発掘届・発掘通知を遺跡別にみると東円寺跡が15件、大久保B遺跡が5件、降井家屋敷跡・大谷池遺跡が各2件、久保城跡が6件で、紺屋遺跡・城の下遺跡・小垣内遺跡・白地谷遺跡・大浦中世墓地・大久保D遺跡が各1件である。

また、本年度より500㎡以上の敷地面積を有する開発行為に関しては、周知の遺跡の範囲外であっても、事前に試掘調査を実施して埋蔵文化財の有無を確認するよう指導しており、開発者より「試掘調査依頼書」が提出されている。

これについては、本年度は6件であった。特に公共事業については、周知の遺跡以外であっても事前に文化財の存否確認調査をするよう配慮しており、本年度も立会1件、試掘2件を実施した。その結果新たに2ヵ所の遺跡を発見し、文化財保護法第57条の6第1項に基づく遺跡発見通知を文化庁に提出した。

本年度の発掘届・発掘通知の調査の結果は表-1にまとめたので参照願いたい。



第1図 熊取町の位置

第1表 昭和62年度調査地一覧表

(昭和63年3月31日現在)

番号	道路名	所在地	申請者	用途	申請面積	備考
1	東門寺跡	五門1310-1, 1034-6	藤本一治	店舗建築	945.67㎡	試掘 遺物包含層なし
2	東門寺跡	野田2326-4, 2327-1	藤原アキノ	店舗建築	215.89㎡	試掘 遺物包含層なし
3	東門寺跡	野田2318-1	文庫ひとみ	個人住宅建築	351.63㎡	調査 本報告書掲載
4	東門寺跡	野田2318-1	泉州機産株式会社	宅地造成工事	351.64㎡	調査 原因者負担 現在整理中
5	東門寺跡	野田2328-7	藤原利三	店舗建築	66.98㎡	試掘 遺物包含層なし
6	東門寺跡	野田2289-1	藤原みさこ	複壁工事	223.53㎡	立会 遺物包含層なし
7	東門寺跡	大久保2089	坂上義規	店舗建築	351.38㎡	立会 遺物包含層なし
8	東門寺跡	五門1191-21, 紺屋250-1	大畑明生	個人住宅建築	— ㎡	立会 遺物包含層なし
9	東門寺跡	野田2326-1	藤原アキノ	広告塔設置	146.18㎡	立会 遺物包含層なし
10	東門寺跡	野田2360-2他	神橋秀次	個人住宅建築	268.24㎡	調査 本報告書掲載
11	東門寺跡	紺屋201-1	坂上源太郎	店舗建築	1200㎡	立会 遺物包含層なし
12	東門寺跡	五門1191-18, 紺屋250-2	吉本善太郎	個人住宅建築	140.97㎡	立会 遺物包含層なし
13	東門寺跡	野田2244	熊取町長 下中 融	庁舎増築	370㎡	現在協議中
14	東門寺跡	五門1033-1他	坂上建治	店舗建築	1376.8㎡	現在協議中
15	東門寺跡	野田2321-2他	大坂いずみ市民生協	店舗建築	1108.4㎡	調査 原因者負担 現在整理中
16	大久保B遺跡	熊取町駅前整備地区	熊取町長 下中 融	区画整理事業	7288.0㎡	試掘 遺物包含層なし
17	大久保B遺跡	大久保341-3	泉川興産株式会社	ビル建築	354.56㎡	試掘 遺物包含層あり
18	大久保B遺跡	大阪外環状線	大阪ガス株式会社	ガス管敷設	0.4㎡	試掘 遺物包含層なし
19	大久保B遺跡	熊取町駅前整備地区	熊取町長 下中 融	区画整理事業	7364.4㎡	現在協議中
20	大久保D遺跡	大久保341-1他	田中 徳	店舗建築	1065.3㎡	調査 原因者負担 現在整理中
21	陸井家屋敷跡	大久保9	橋本一義	個人住宅建築	433.89㎡	調査 本報告書掲載
22	陸井家屋敷跡	府道河原佐野線	大阪府南和田土木事務所	歩道拡充工事	1,500㎡	立会 遺物包含層なし
23	久保城跡	久保1572-1	山本文生	個人住宅建築	149.8㎡	試掘 遺物包含層なし
24	久保城跡	久保1597, 1598-1	田中 祐利	工場建築	859.36㎡	試掘 遺物包含層なし
25	久保城跡	久保1572-6	池野喜明	個人住宅建築	120.3㎡	試掘 遺物包含層なし
26	久保城跡	久保36	萬納友明	工場建築	395㎡	試掘 遺物包含層あり
27	久保城跡	久保443-2他	田宮 浩	アパート建築	842㎡	試掘 現在本調査協議中
28	久保城跡	久保11	北本 弘	個人住宅建築	161㎡	試掘 遺物包含層なし
29	小畑内遺跡	小畑内22-1	谷上 伸	個人住宅建築	255.73㎡	試掘 遺物包含層なし
30	大谷池遺跡	紺屋6-53	太井 真	個人住宅建築	261.10㎡	試掘 遺物包含層なし
31	大谷池遺跡	大久保218-11	南大阪リハルス株式会社	住宅建築	134.7㎡	試掘 遺物包含層なし
32	御屋遺跡	紺屋77-1	阪上 福松	事務所建築	329㎡	試掘 遺物包含層なし
33	白地谷遺跡	大阪外環状線	大阪ガス株式会社	ガス管敷設	㎡	試掘 遺物包含層なし
34	城の下遺跡	小谷160-26	若尾俊雄	個人住宅建築	152.4㎡	試掘 遺物包含層なし
35	大津中世墓地	久保705他	西 繁 康 男	個人住宅建築	354.58㎡	調査 本報告書掲載
36	西の池	久保1071-1, 2	熊取町長 下中 融	学校用地造成	0.4㎡	立会 遺物包含層なし
37	弘池	野田1222-2	大阪府泉南耕務事務所	池堤改修工事	2,000㎡	立会 遺物包含層なし
38	永壽池	久保2874-2	大阪府泉南耕務事務所	池堤改修工事	4,500㎡	立会 遺物包含層なし
39	坊主池	大久保1835-1, 2	熊取町長 下中 融	池堤改修工事	5.6㎡	立会 遺物包含層なし
40	鳥の池	七山548-1, 2	熊取町長 下中 融	池堤改修工事	0.45㎡	立会 遺物包含層なし
41	清水上池	小谷308-1, 2	熊取町長 下中 融	池堤改修工事	5㎡	立会 遺物包含層なし
42	鉢谷池	七山1329-1, 2	熊取町長 下中 融	池堤改修工事	253.75㎡	立会 遺物包含層なし

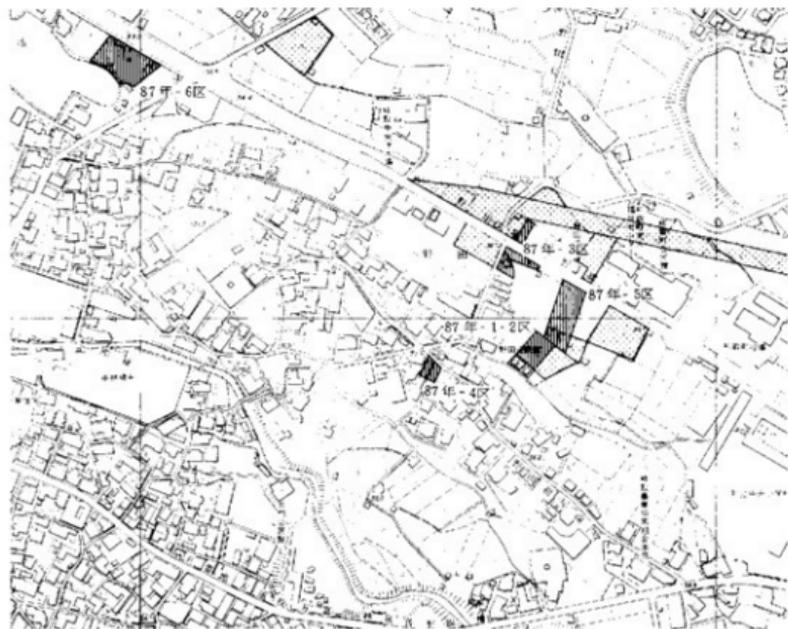
第2章 東円寺跡の調査

第1節 東円寺跡87年-1区の調査

1. 位置と環境

東円寺跡87年-1区は、小字名では堂の後に当たる地点である⁽¹⁾。調査地は昭和60年に既にトレンチ調査を行っており、多数のピットが検出されている⁽²⁾。

周辺の地形は、調査地の南方向に位置する大井出川・住吉川にむかって標高を下げていく地形で、中位段丘の前縁となる部分である。東円寺跡では、既往の調査などで東円寺(跡)を支えてきた「経済基盤」としての水田、灌漑施設や集落の存在については、確認されてきたが、今回の調査結果により、東円寺の創建以前である奈良時代前期の集落であることが確認できた⁽³⁾。

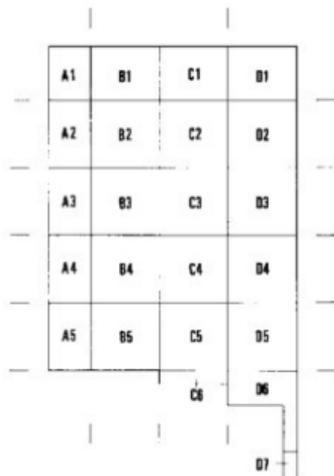


第2図 調査地位置図

II. 調査の方法と地区の名称

調査は長さ13m、巾1mの南北トレンチと長さ18m、巾1mの東西トレンチを1本ずつ調査地内に設定し調査実施したが、ピット・溝などの遺構を検出し須恵器・土師器・瓦が出土したので当該地の遺構の性格を知るため南北13m、東西18mの234㎡を調査することとした。

調査地内で、南北方向はアルファベットによる地区名で呼称し、A・B・C・Dと表し、東西方向はアラビア数字による地区名で呼称し、1・2・3・4と表すこととする。本書中でも遺構の位置等の表し方はこれに準じ、A1・B2と表すこととする。また、調査地での南北の基準線の方位は、磁北より38°西へふっている。



第3図 地区割り図

III. 遺構と遺物

基本土層としては、上層より約20cmの表土と5cm前後の床土層、黄褐色粘質土層、黄橙色粘質土層と堆積し、地山の橙褐色粘土層に達する。土層の堆積はほぼ水平であったが、遺構の埋土は紫灰色を呈しており、堆積している土層と色調・土質が異なっていた。また、第4層である黄橙色粘質土層からは奈良時代から中世までの遺物が出土しており、これは中世以降に大規模な削平、整地を行った跡とも思われる。

今回検出された遺構はすべて地山面を削り込んでいる形で検出された。検出した遺構としては、奈良時代前期とみられる掘立柱建物が4棟(SB-1, SB-2, SB-3, SB-4)、不整形土壇が2基(SX-1, SX-3)、ピットが130基、中世の溝が1条(SD-1)、掘立柱建物が1棟(SB-5)、不整形土壇が3基(SX-2, SX-4, SX-5)、

溝が一条、土壇墓が一基である。以下遺構についての詳細を述べることにする。

1. 不整形土壇

S X - 1

S X - 1 は調査区 B 3 ・ C 3 で検出された不整形土壇で、長軸は 3.8 m を測り、短軸は 1 m を測る。深さは約 30 cm で、埋土は紫灰色粘質土である。遺物としては、土師器の甕・坏・高坏・須恵器の杯・蓋杯が出土した他に、製塩土器も出土している。

S X - 2

S X - 2 は調査区 C 1 で検出された不整形土壇で、長軸は 1.8 m を測り、短軸は 1.7 m を測る。深さは約 40 cm で、埋土は黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

S X - 3

S X - 3 は調査区 D 5 で検出された不整形土壇で、長軸は 1.1 m を測り、短軸は 60 cm を測る。深さは 25 cm で、埋土は紫灰色粘質土である。遺物は土師器・須恵器の破片が出土した。

S X - 4

S X - 4 は調査区 D 5 で検出された不整形土壇で、長軸は 1.2 m を測り、短軸は 60 cm を測る。深さは約 20 cm で、埋土は暗灰色粘質土である。遺物は土師器・須恵器の破片が出土した。

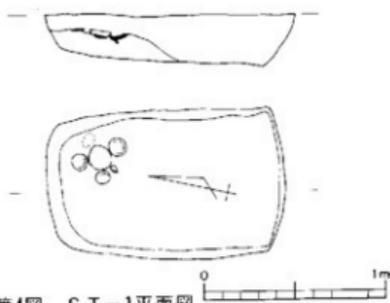
S X - 5

S X - 5 は調査区 D 5 で検出された不整形土壇で、長軸は 1 m を測り、短軸は 50 cm を測る。深さは約 35 cm で、埋土は暗灰色粘質土である。遺物は土師器・須恵器・瓦器の破片が出土した。

2. 土 墳 墓

ST-1

ST-1は調査区D5で検出された土墳墓で、長軸は1.2m、短軸は85cmを測る。深さは約30cmで、埋土は暗灰色粘質土である。遺物は、副葬品とみられる完形の瓦器と共に、ほぼ完形の上師器小皿が5点出土した。



第4図 ST-1平面図

3. 掘立柱建物

SB-1

SB-1は調査区B3・C3で検出した。規模は梁間二間、桁行三間で柱間は梁間が1.5m前後で桁行が1.6m前後を測る。遺物はPit 102より土師器甕の口縁部が出土している。

SB-2、3

SB-2は調査区D2・D3で検出した。規模は梁間二間、桁行三間で柱間は梁間が1.7m前後で桁行が2.5m前後を測る。

SB-3は調査区C5・D5で検出した。規模は梁間二間、桁行三間で柱間は梁間が2.2m前後で桁行が2m前後を測る。いずれも遺物は出土しなかった。

SB-4

SB-4は調査区D4で検出した。建物のすべてを検出していないが昭和60年度の調査で検出されたピットと並ぶので建物跡と判断した。柱間はPit 401とPit 402の間が2.1m前後を測り、Pit 401・Pit 404・Pit 403の間が1.8m前後を測る。遺物は土師器・須恵器の破片が出土している。

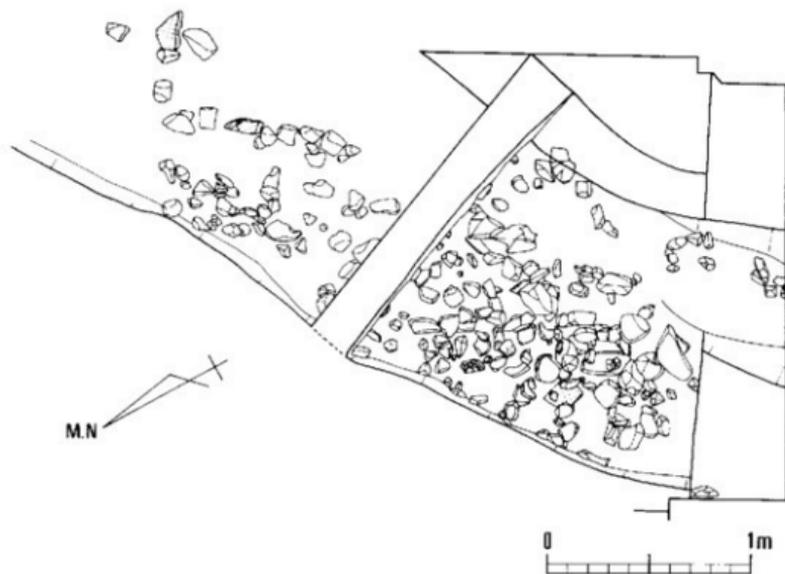
SB-1・2・3・4を構成しているそれぞれのピットから出土した遺物は、

時期が同じで、遺構の法量が近似していることから同時代の建物跡だと思われる。遺構の時期は8世紀前半が与えられそうである。

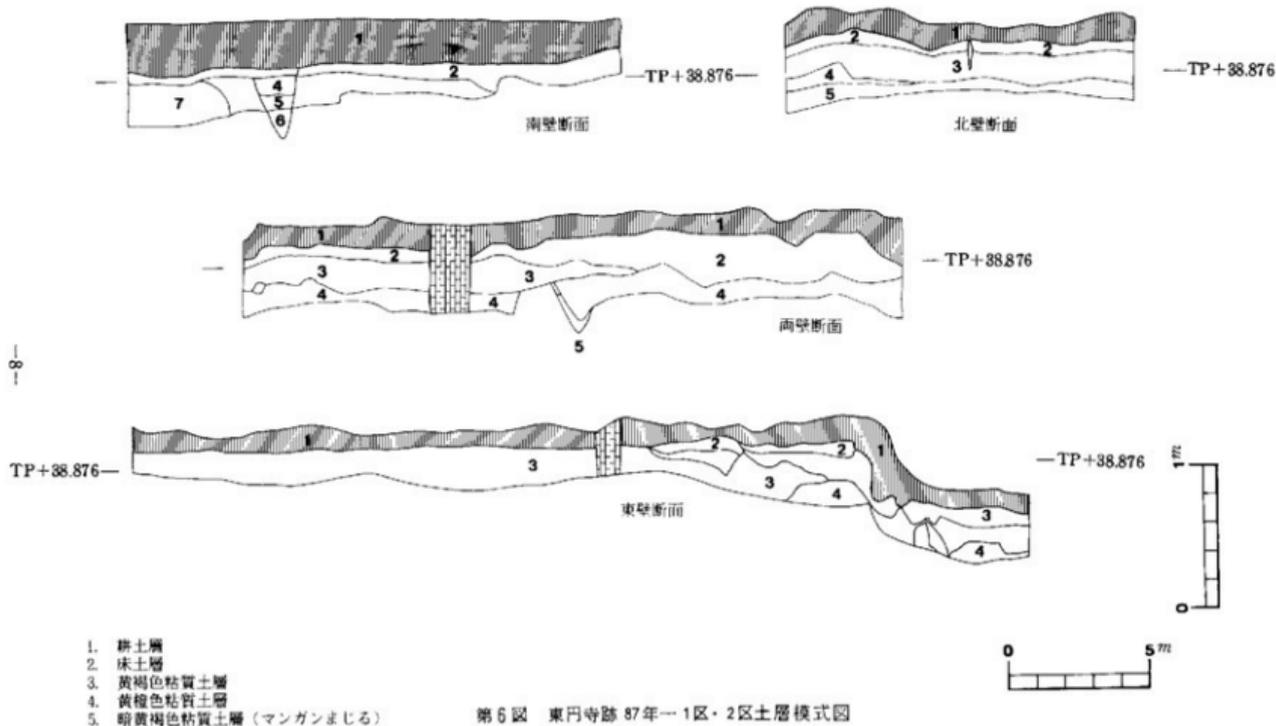
また、奈良時代の掘立柱建物の他に中世のものと思われるSB-5も検出した。それぞれのピットより瓦器などが出土した。

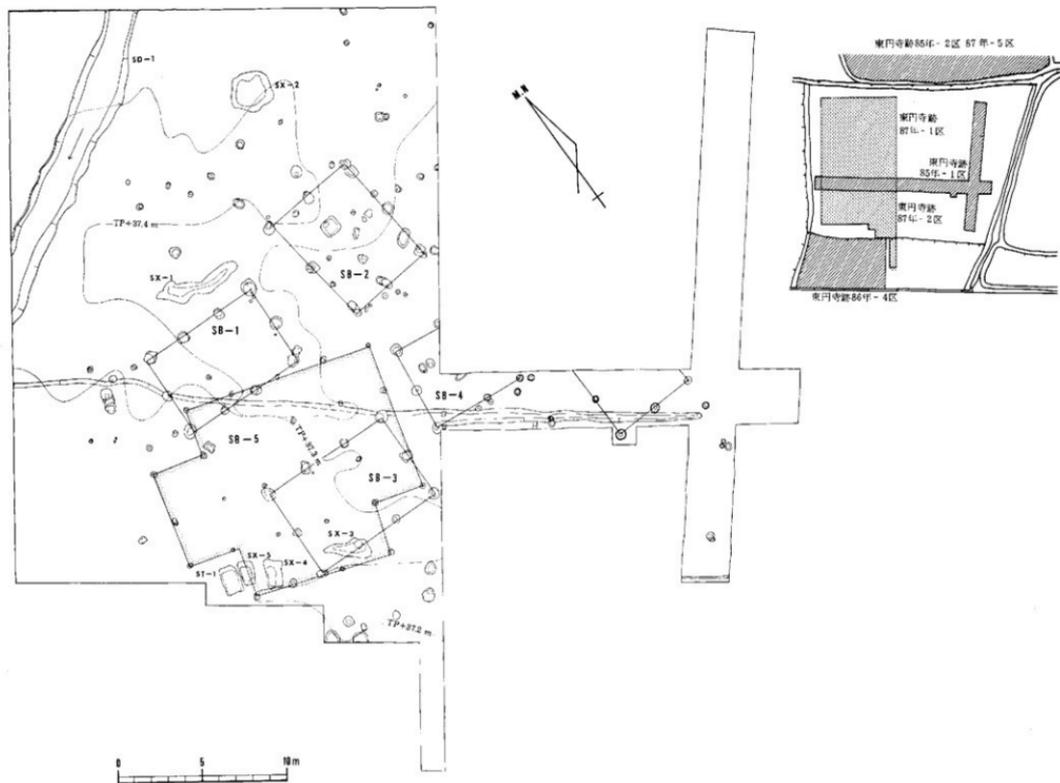
4. 溝 SD-1

SD-1は調査区A1・2からB1・2へ流れる巾1.8m、深さ約60cmの溝である。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては、土師器・須恵器・東播系こねばち・土塼・瓦器などの他に、瓦の破片・蓮華文軒丸瓦・唐草文軒平瓦の瓦当が出土した。

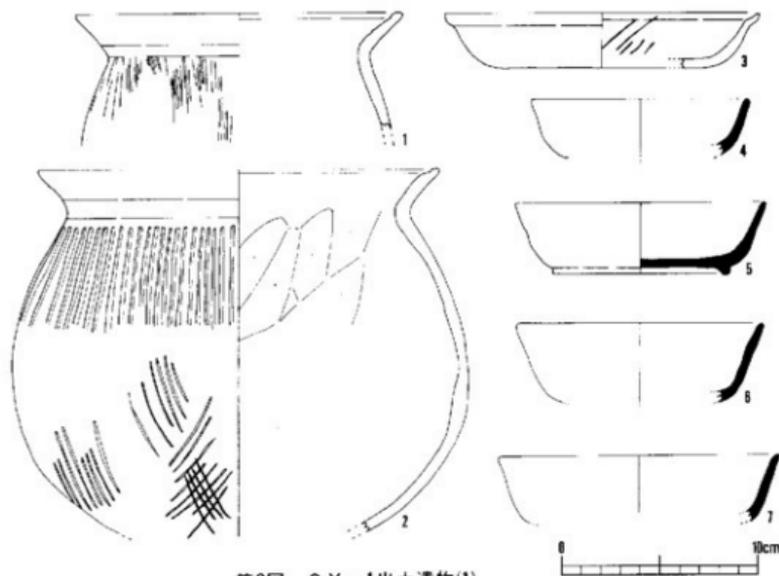


第5図 SD-1石溜り平面図





第7図 東門寺跡 87年-1区・2区平面図



第8図 SX-1出土遺物(1)

IV. 出土遺物

出土遺物は8世紀から14世紀までの遺物が出土した。以下遺物について述べる。

1. 不整形土壘SX-1 (第8図. 図版第四)

第8図1・2は土師器甕である。1は口縁部から肩部のみの残存である。調整は頸部から肩部にかけて刷毛目が見られ頸部にスリケシ調整が施されている。また、口縁部内側に一条沈線がみうけられる。

2はくの字型に外反した口縁部を持ち、口縁部内側に沈線がみうけられる。肩部には刷毛目が見られ、頸部にスリケシ調整が施されている。底部の刷毛目は斜め二方向から施され、内面には多方向からナデ調整が施されている。

3は土師器の坏で、外反した口縁部を持ち、内面には螺旋暗文が確認できた。

4・5・6・7は須恵器杯で、外面・内面にろくろ回転による調整を施す。

2. 製塩土器 (第9図、図版第五)

製塩土器はすべて破片で、出土し図化し得たのは第9図の4点のみであった。SX-1出土の製塩土器は、胎土や形状で判断すると4形態あり、製塩土器を整理と分類の為にI型、II型、III型、IV型と呼称することとした。

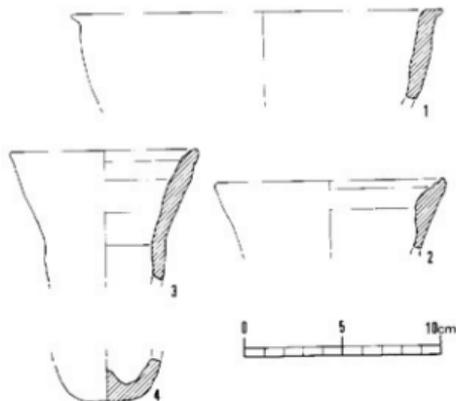
I型(第9図1)は他の型式に比べて口縁が広い、口縁と体部のみの残存で、摩滅が進んでおり調整は読み取れない。胎土はやや粗い。

II型(第9図2)は朝顔状に開いた口縁を持ち、口縁内部に麓などによる調整が施されている。II型は阪南町田山遺跡出土のII類a2型式⁽⁴⁾と類似している。

III型(第9図3)はII型と同じように朝顔状に開いた口縁を持つが、胎土に石英砂が多く混じっている。第9図4はIII型の底部であると考えられる。外面には乳白色の塩化ナトリウムが付着したと思われる焼成痕が残っている。内部にはつまみ状の突出がみうけられる。

IV型は、どの部分の破片かが判明しない為に図化することはできないが他の3形態の製塩土器に比べてかなり大きな曲線を持つ製塩土器である。

今回SX-1より出土した製塩土器は量的にはコンテナー一杯程度の量であり少ない量であった。奈良時代の集落において、この製塩土器が実際に製塩に使用されているのか、若しくは祭祀等に使用されていたのかは推察の域を出ない。



第9図 SX-1出土遺物(2)

3. 土壌墓ST-1

ST-1からは土壌墓の副葬品とみられる瓦器碗、土師器小皿、鉄釘などが出土している⁽⁵⁾。

第10図1は瓦器碗である。外面はユビオサエ

が施されており、高台は貼り付けてある。内面はヘラミガキが施されている。

2・3・4・5・6はいずれも土師器小皿である。口径は8.2 cm前後で、器高も1.4~1.8 cmと大きさもほぼ均一である。形態は、やや凹凸のある底部と、短く外上方に伸びる口縁部を有する。

第11図1・2・3は鉄釘で棺材に使用したものであろう。いずれも錆による腐食が進み、木片(棺材)などの付着はない。

4. 溝SD-1 (第12図1・2・3・4・5・7・8・9)

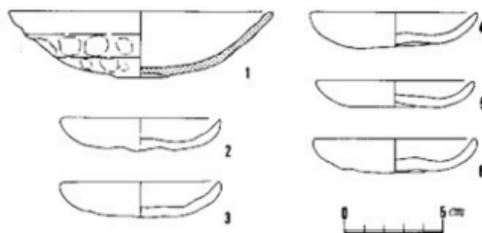
第12図1は瓦質の甕の口縁と思われる。

2・3は東播系こねばちの口縁部である。

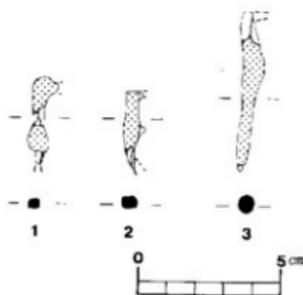
2はくの字型に内傾する口縁を持ち、3は口縁外部がやや外側に開いている。4は器

種は確定できないが、須恵質の鉢の底部である。5は須恵器の杯の底部で、外面にろくろによる調整が施されている。7・8は瓦器小皿である。7は底部にヘラズリを施してある。8は外反する口縁を持つ。内面には一部暗文がみうけられる。9は瓦器碗で外反する口縁を持つ。

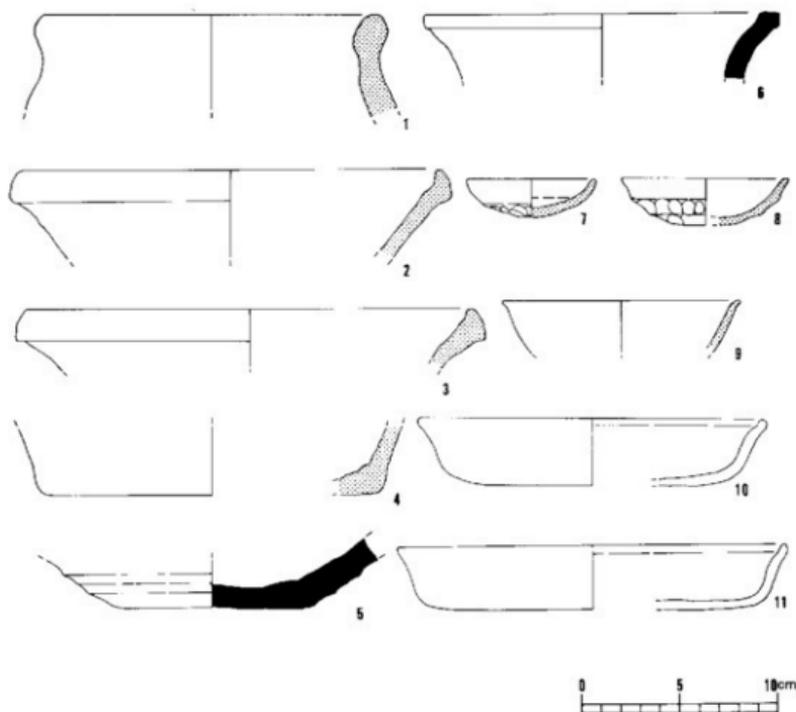
SD-1の遺物で示し得たのは上記の8点であるが、その他の遺物を含め判断すると、溝の埋積の時期は14世紀頃の年代が与えられそうである。



第10図 ST-1出土遺物(1)



第11図 ST-1出土遺物(2)



第12図 東円寺跡87年-1区出土遺物

3. その他の遺物（第12図6・10・11）

6は調査区C6の遺物包含層から出土した須恵器の甕の口縁である。外面はろくろ調整の後、丁寧にスリケシ調整されている。また、口縁上部に自然釉がかかっている。

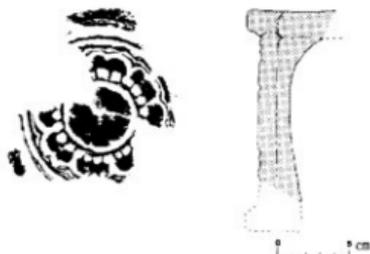
10、11はPit12から出土した土師器の坏である。くの字に外反した口縁を持つ。内面は摩滅が進んでいる為に暗文があるのかは判らない。（井田）

V. 出土瓦

今回の調査でも、東円寺に関係すると思われる瓦が多量に出土した。調査区全体で瓦は出土しているが、特に溝SD-1からの出土がめだつた。以下瓦の観察を行う。

1. 蓮華文軒丸瓦（第13図）

瓦当面のみ残存する複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当は約4cmの中房と複弁及び2本の圈線と、周縁部で構成されている。中房は、摩滅が進んでいる為に蓮子の有無は確認できないが、花卉と同数の蓮子が有るものと考えられる。また、周縁部と外側の圈線の間に瓦当の貼り付けを示す



第13図SD-1出土瓦

と思われるひびが入っている。胎土はやや軟質で、褐灰色を呈し、1~2mmの礫を含み、比較的精緻なものである。

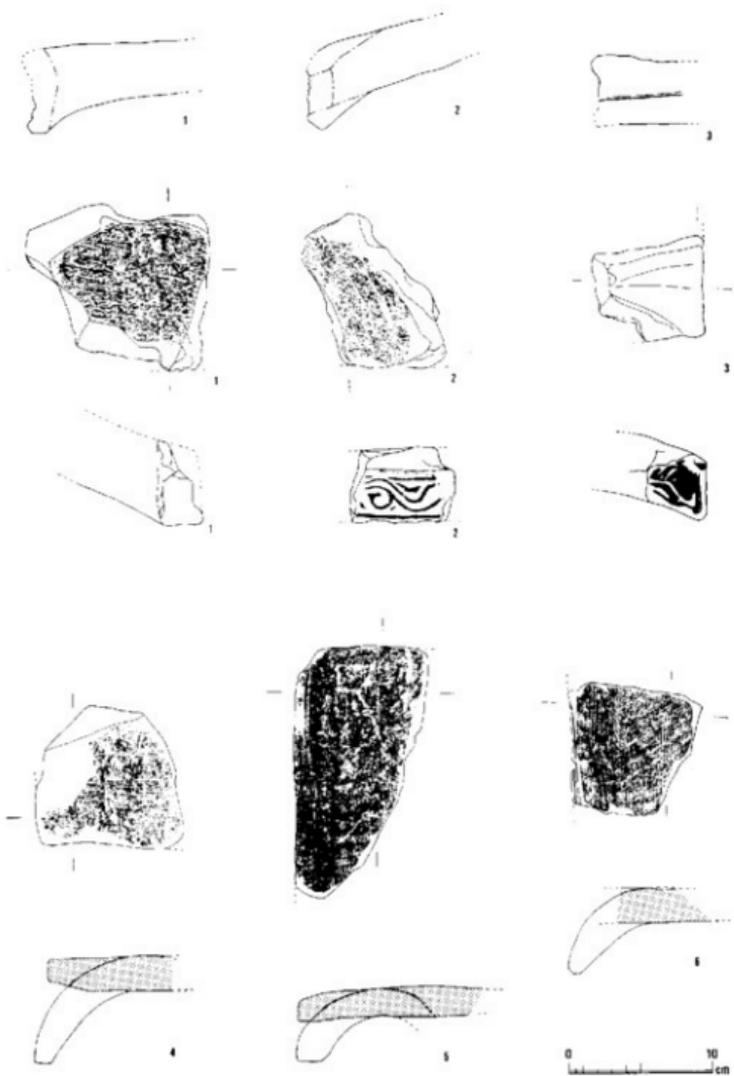
類似する瓦当の蓮華文軒丸瓦としては、大阪府岸和田市所在の大飼堂廃寺の出土瓦があげられる⁽⁶⁾。

2. 唐草文軒平瓦（第14図1・2・3）

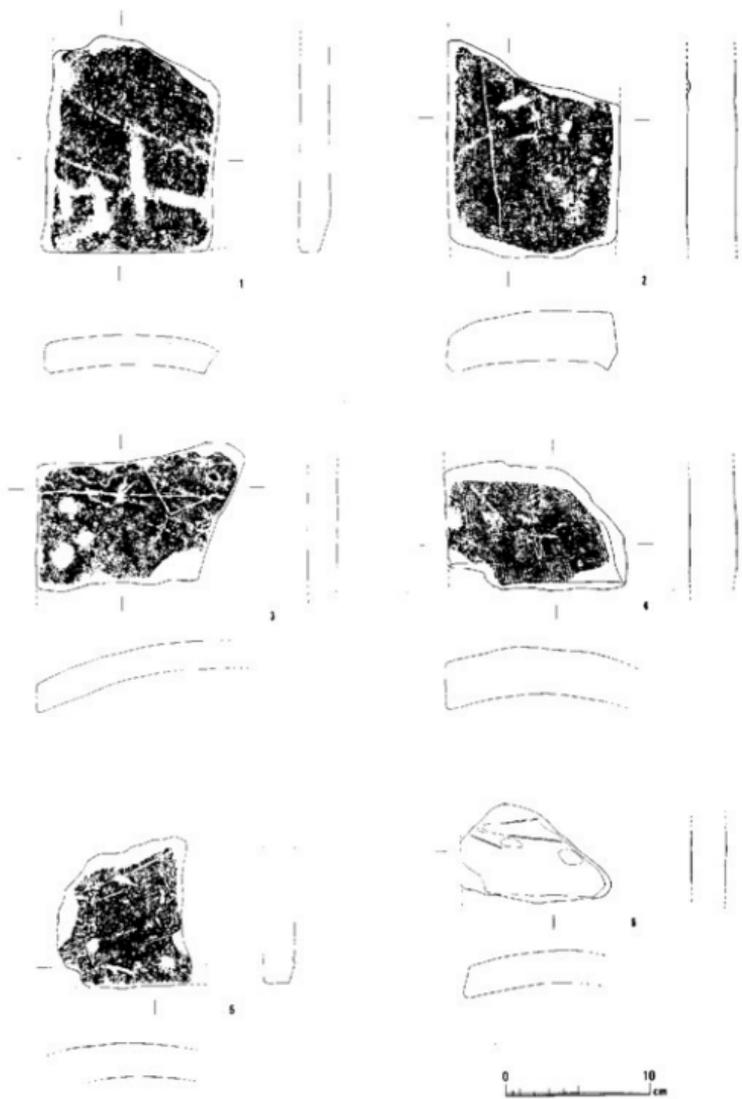
3点すべてが瓦当面の一部を含む無顎式軒平瓦の破片である。

1は瓦当面の周縁が僅かではあるが残っており唐草文も一部残っている。凸面には縦方向のナデを施し、凹面には布目痕がある。胎土は良好で1~2mmの礫を含み精緻である。焼成は2次焼成を受けているようである。

2は内区に圈線を持つ。瓦当面は平瓦端部に貼り付けてあり、周縁部に粘土を継ぎ足している。周縁部はヘラケズリで調整し凸面は縄叩きと縦方向のナデを一部に施す。胎土は1~2mmの礫を含み、精緻である。



第14图 87年-1区出土瓦(1)



第15图 87年-1区出土瓦(2)

3は平瓦端部に直接范を瓦当面に押している。凸面、凹面共にナデを施しており、凹面には布目痕が確認できた。胎土は良好で褐灰色を呈し、1~2mmの礫を少量含み、精緻である。焼成は2次焼成を受けているようである。

3. 丸瓦（第14図4・5・6）

4は二辺が残存する厚さ2.5~2.5cm丸瓦の破片である。凸面、凹面共にナデを加え端部にはヘラケズリを施している。胎土はやや軟質で乳白色を呈し、1~3mmの石英砂を含み、精緻である。

5は二辺が残存する厚さ2.0~2.5cm丸瓦の破片である。凸面は表面が摩滅している為に調整痕は読み取れない。凹面は布目痕が残り特に縦方向の布目が鮮明に残っており、端部はヘラケズリが施されている。胎土は硬質で灰白色を呈し、1~3mmの白色、黒色の礫を含み、精緻である。

4. 平瓦（第15図1・2・3・4・5・6）

1は二辺が残存する厚さ約2cmの平瓦の破片である。凸面、凹面共にナデを施しているようであるが、摩滅している為に明確ではない。凹面には指頭圧痕が3ヵ所みうけられ端部はヘラケズリによる調整を施してある。胎土はやや軟質で淡赤褐色を呈し、礫は0.5~4.0mmの白粒と黒粒を多く含み、精緻である。

2は縦二辺が残存する厚さ約3cm平瓦の破片である。凸面、凹面共にナデを施しているようであるが、摩滅している為に明確ではない。凸面に粗いハナレズナが施され、端部はヘラケズリで調整してある。胎土はやや軟質で淡赤褐色を呈し、礫は殆ど含まれていない。

3は一辺が残存する厚さ約2cmの平瓦の破片である。凸面、凹面共にナデの後にハナレズナを施してある。凸面には記号ともみられる線が筥によって刻されている他に指頭圧痕がみうけられる。胎土は硬質で赤褐色を呈し、殆ど礫を含まない。

4 は一辺が残存する厚さ約 3 cm の平瓦の破片である。凸面は縦方向のナデを施し凹面には布目痕が残る。端部はヘラケズリによる調整が施されている。胎土は硬質で青灰色を呈し、0.5～2.0mm の白色の礫を含み、精緻である。

5 は一辺が残存する厚さ約 2 cm の平瓦の破片である。凸面はナデを施し、凹面はナデの後に密なハナレズナを施しており、端部はヘラケズリで調整してある。胎土は硬質で暗灰色を呈し、殆ど礫を含まず精緻である。

6 は一辺が残存する厚さ約 2 cm の平瓦の破片である。凸面、凹面共に摩滅が進み調整痕は読み取れない。胎土は軟質で赤褐色を呈し、1～2mm の礫を含む。
(渡辺)

今回の調査で出土した瓦は殆どが赤色か茶色を呈しており、2 次焼成をうけたものと考えられる。これは隣接する東円寺跡 8 5 年 - 2 区においても同じ状況であった。もしこの瓦の 2 次焼成が火災などによるものとするならば、結論は以後の調査の蓄積を待って、何らかの形でその責を果たしたい。

VI. 小 結

今回調査を実施した地点は、比較的平坦な段丘面で、既往の調査でも調査以前から集落の存在は充分に予想されていた⁽⁷⁾。調査を実施した結果、奈良時代から中世までのピットが検出され、そのうち奈良時代の建物跡が 4 基と中世の建物跡が 1 基確認された。これによって当該地がそれぞれの時代に集落の一部を占めていたことが確認できた。その他の遺構としては、不整形土壇、中世の土壇墓、溝などを検出し、それに伴って遺物も多量に出土した。それらの検出された遺構の状態や出土遺物の年代から判断する限り、当該地は奈良時代より中世に至るまでは、集落若しくは居住地として存在し、中世以降は水田として利用され、水田を造成する為に削平・盛り土を繰り返していたようである。

今後は周辺の調査で得られたデータの蓄積を待って、今回の調査で検出された「集落の規模」や更に詳細な「土地利用の変遷」について検討する必要があると思われる。

第2節 東円寺跡 87年-4区の調査

東円寺跡 87年-4区は、小字名では垣内田にあたる地点である。調査は長さ3m、巾2mの第1グリッドと長さ3m、巾1mの第2グリッドを調査申請地内に設定し実施した。

層序は上層より表土、攪乱層、旧耕土、紫灰色粘質土、茶褐色粘質土、黄褐色粘質砂と堆積し地山の橙褐色粘土(礫まじり)に達する。遺構は検出されなかったが、旧耕土以下地山直上まで遺物包含層で須恵器・瓦器・東播系こねばち・羽釜・伊万里染付などの破片が出土したが総て破片である為に図化できなかった。



第16図 東円寺跡87年-4区土層図

註

- (1) 井田匡『熊取町遺跡群発掘調査概要報告書』Ⅰ熊取町教育委員会(1987)
- (2) 松村隆文・森屋直樹『東円寺跡発掘調査概要』Ⅰ熊取町教育委員会(1987)
- (3) 藤沢真依『東円寺跡発掘調査概要報告書』Ⅰ大阪府教育委員会(1983)
芝野圭之介『東円寺跡発掘調査概要報告書』Ⅱ大阪府教育委員会(1984)
- (4) 中西靖人・小島成元・国乗和雄・宮野淳一・村上年生『田山遺跡』観大阪文化財センター(1983)
- (5) 鈴木陽一『檀波羅蜜寺—86-4区の調査—』泉佐野市教育委員会(1987)
熊取町と隣接する泉佐野市所在の檀波羅蜜寺でも同様の土壌層が検出されている。
- (6) 『岸和田の文化財 写真集(市内出土瓦)』Ⅴ岸和田市教育委員会(1977)
- (7) 註(2)文献に記載されている。

第3章 降井家屋敷跡 86年-1区の調査

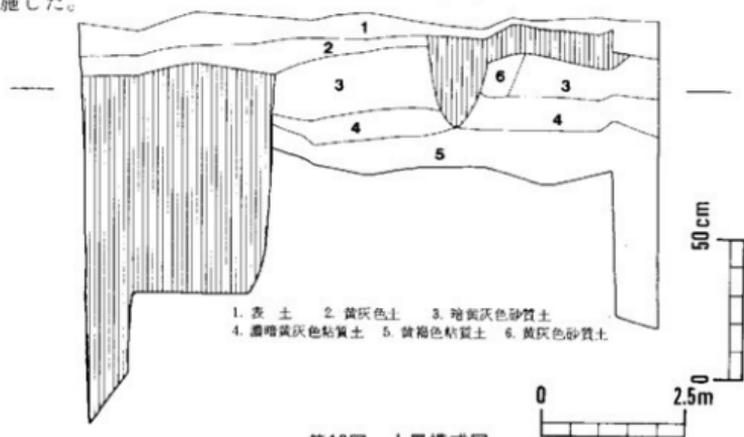
第1節 降井家屋敷跡 86年-1区の調査について

降井家屋敷跡は、中世後期に熊取荘及び近隣の村落を支配していた豪族層である降井家の屋敷地周辺で昭和60年度に発掘調査を実施したところ、屋敷を画する為と思われる溝を検出した。これにより昭和61年発行の大阪府教育委員会発行の文化財分布図に、位置とその範囲が掲載されることになった。

降井家屋敷跡 86年-1区は現存している降井邸の東側に位置し、重要文化財降井家書院と隣接している。天保年間の屋敷図で見ると、屋敷の庭園部であったようである。調査は調査申請地内に長さ10m、巾2mの南北トレンチと長さ5m、巾2mの東西トレンチをそれぞれ1本ずつ十字に設定して調査を実施した。



第17図 調査地位置図



第18図 土層模式図

層序は上層より表土、黄灰色土、暗黄灰色砂質土、濃暗黄灰色粘質土と堆積し、地山の黄褐色粘質土に至る。これらは近代に堆積したものと考えられる。また、南北トレンチの北側に攪乱が存在したが、この攪乱より近世後期の陶磁器、瓦の破片が多量に出土した。

第2節 出土遺物（第19図～18、図版第8）

出土遺物の大半は攪乱から出土し、量的にはコンテナにして約3杯程の遺物が出土した。いずれも近世の陶磁器・瓦片である。

伊万里焼

碗（第19図1・6・7・8・10・11・12・13・14）6・10・13の碗以外の碗は総て見込みの軸を蛇の目に掻き取った痕がある。1は口縁のみの破片で、外面に草花文を配してある。6・13は外面に草花文を配し、呉須の色が淡い。7、8、14は高台にハナレズナが付着しており、みこみに渦巻き文がある。10・11は外面に自然貫入が入っている。12は見込みに多数の噴き出しがみられる。

鉢（第19図3）やや白っぽい軸を施し、外面には唐草文を配してある。

唐津焼

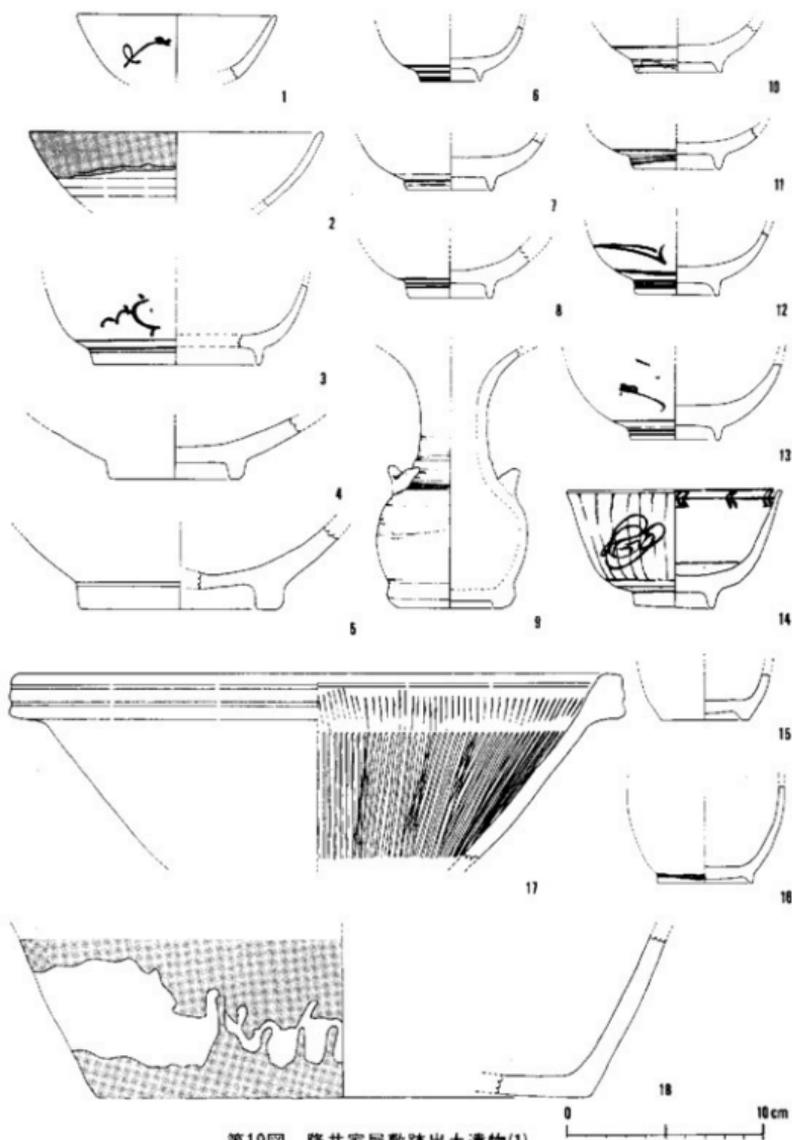
碗（第19図2）内面・外面に緑色の軸が施され、噴き出しがみうけられる。

鉢（第19図4・5）4は内面、外面共に灰色軸を施し、見込みの軸を蛇の目に掻きとってある。5は内面は総軸で外面は腰部まで施軸してある。高台は糸切りの後に丁寧にスリケシを施してあるが、高台内面は未調整のままである。

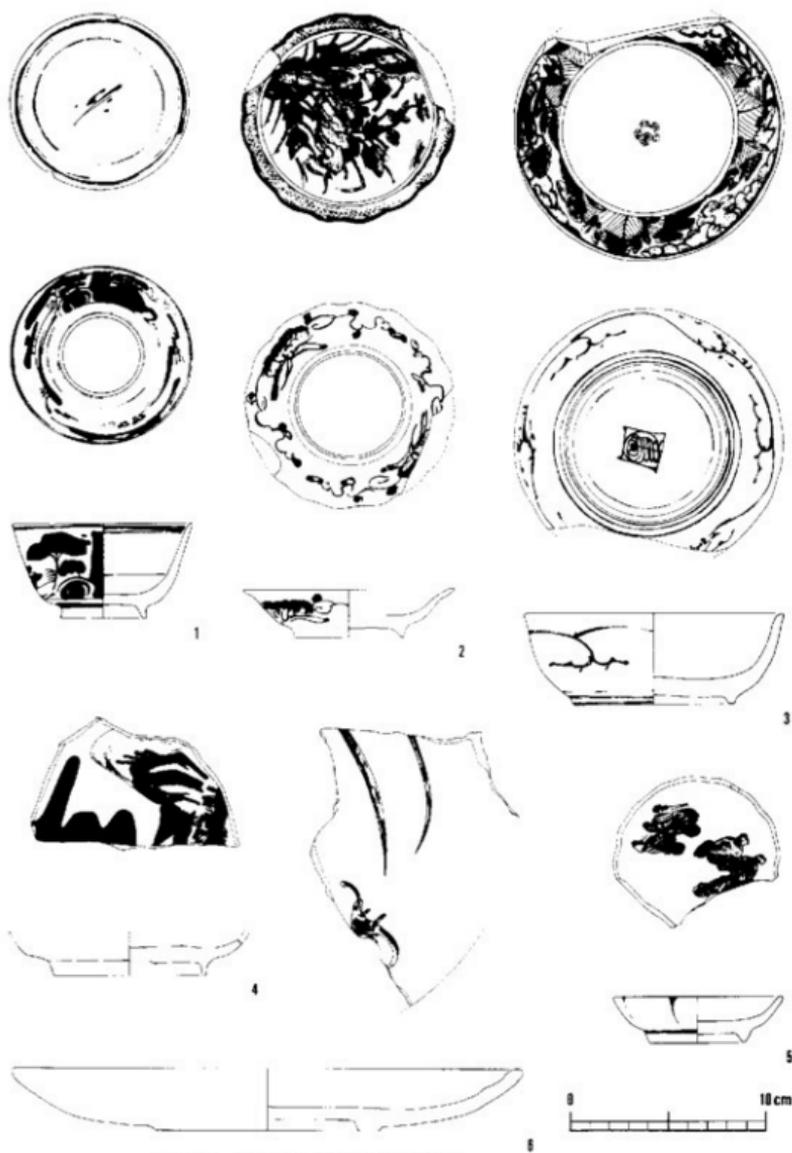
花瓶（第19図9・15・16）いずれも仏花器として使用されたものと思われる。9は青磁の花瓶である。15は胎土が粗く、自然貫入がみうけられる。16は底部に赤い呉須が一条はいつている。

淡焼すりばち（第19図17）備前のすり鉢を模倣したと思われる。胎土は粗く2mm～5mmの砂粒を含み焼成は軟質である。色調は赤橙色を呈す。

甕 第19図18は備前の甕であるが底部の一部の残存である。



第19回 降井家屋敷跡出土遺物(1)

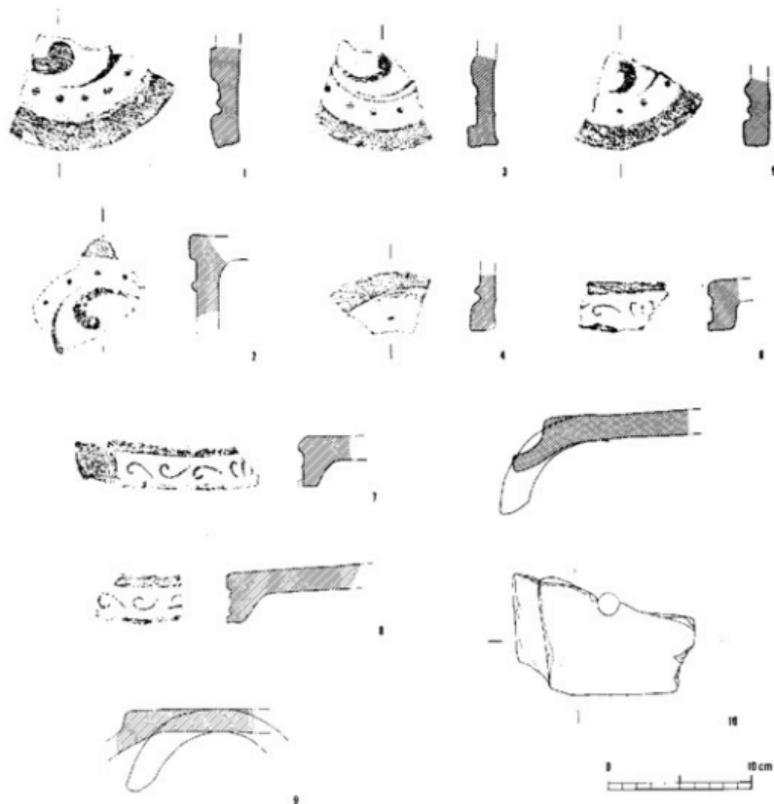


第20図 降井家屋敷跡出土遺物(2)

その他（第20図1～6、図版第六、第七、第八）

1は外面に山水文を配した碗であり、やや外反した口縁を持つ。2は花卉文を外面に配した皿である。3は高台に渦福文、みこみに五弁花文を配した伊万里の皿である。4は蛇の日凹型高台を持つ皿であるがみこみの呉須が溶けている。5は伊万里の小皿である。6は瀬戸の陶胎染付である。

今回の調査によって出上した近世陶磁器では大半は18世紀頃の年代が与えられると思われる。一部19世紀の遺物も混じるようである。（井田）



第21図 降井家屋敷跡出土瓦(1)

出土瓦

軒丸瓦（第21図1・2・3・4・5）

5点とも左回りの巴文ですべて破片である。

1は巴文が平面的な円形で、大きな頭部を持ち、尾部も長いのが特徴である。連珠は平らで大きく、周縁部も幅が広い。周縁は端部をヘラケズリで調整したのち、部分的に指ナデを施す。瓦当面の裏面には指頭圧痕がみうけられる。色調は黒灰色を呈している。胎土は0.5～3.0mmの礫を含み緻密で、焼成は良好である。

2は周縁を一部含んだ破片である。連珠は小さく疎に並ぶ。巴文の頭部は屈曲して丸い「おたまじゃくし」状であり、尾部は比較的長い。瓦当面の裏面には多方向へのヘラ調整を施す。色調は黒灰色を呈し、胎土は0.2～3.0mmの礫を少量含み緻密で、焼成は良好である。

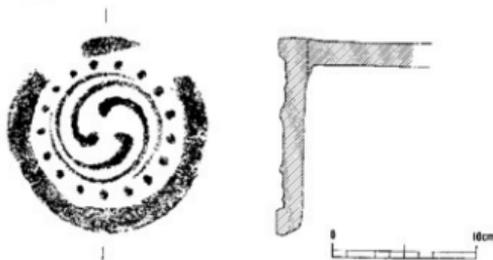
3は連珠と巴文の間に細い圈線を有する。巴文は2と同じ「おたまじゃくし」状であり、尾部は比較的長い。周縁部側面や瓦当面の裏面に多方向への指、ヘラによる調整痕と指頭圧痕が残る。色調は黄灰色を呈し胎土はやや粗く1～2mmの礫を含み、焼成は軟である。

4は周縁の一部と、珠文をひとつ含む破片である。側面と瓦当面裏面には丁寧な指ナデが残る。色調は暗灰色を呈し、胎土は粗く、焼成は良好である。

5は連珠の間隔が疎らである。色調は茶灰白色を呈し、胎土は粗く0.5～2.0mmの礫を含み、焼成は軟である。

軒丸瓦（第22図）

左回りで頭部は小さく、そのまま太さを変えず長い尾を持つ巴文である。連珠は17の丸みのある珠文で構成され、周縁部と瓦当面は段差が大きい。



第22図 降井家屋敷跡出土瓦(2)

周縁側面及び互当面の裏面には、指ナデが施され、凸面はヘラケズリ、凹面はヘラによる横ナデ調整がみられる。色調は黒灰色を呈し、胎土は粗く 0.5～3.5mmの礫を含み、焼成は良好である。

軒平瓦（第21図6・7・8）

3点ともすべて互当面の一部を含む唐草文軒平瓦の破片である。

6は周縁の下部や平瓦凹面に指ナデを施す。色調は暗灰色を呈し、胎土は精緻で0.5～2.0mmの礫を含む。

7は平瓦凹面に篋によるものと思われる横方向へのナデ調整、端部には指ナデが施されている。色調は灰白色で、胎土は1.0～1.5mmの礫を含み粗く、焼成は軟である。

8は平瓦凸面をヘラケズリ、周縁及び周縁下部に指ナデを施す。凹面には縦横2方向へのケズリを施した後、指ナデをして調整を加えてある。色調は黒灰色で、胎土は粗く0.5～1.5mmの礫を含み、焼成は軟である。

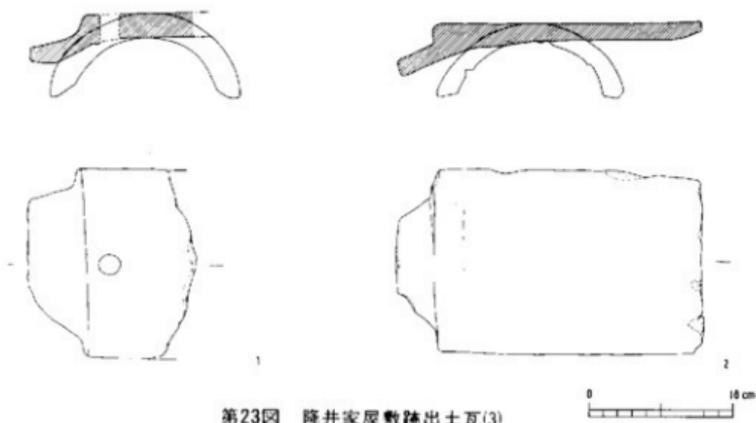
丸瓦（第21図9・10）

9は厚さ1.7cmの丸瓦の破片である。凸面は縦方向のケズリを施した後に指ナデを加えてある。凹面には縦方向と横方向に、それぞれ一条ずつの溝状の線が刻されている。また横方向へのヘラミガキ痕も認められる。色調は暗黄灰色を呈し胎土は精緻で1～2mmの礫を含み、焼成はやや軟である。

10は二辺の残存する厚さ1.6～1.9cmの丸瓦の破片である。凹面凸面共に著しく摩滅している為にめだつた調整痕はよみとれないが、端部にはヘラケズリによる調整痕、凹面にはヘラミガキによるものと思われる横方向の調整痕が残存している。また、丸瓦の上部に瓦を固定する為とおもわれる穴が穿たれている。色調は黒灰色を呈し、胎土は精緻で1～5mmの礫を含み、焼成はやや軟である。

丸瓦（第23図1・2）

1は二辺が残存する厚さ1.7cmの丸瓦の破片である。凹面には篋による横方向へのナデがみうけられる。端部はヘラケズリ、玉縁裏面には未調整の部分が残る。



第23図 降井家屋敷跡出土瓦(3)

また、丸瓦の上部に瓦を固定するための穴が穿たれている。色調は暗黄灰色を呈し、胎土は0.1~2.0mmの礫を含む。焼成は良好である。

2は完形の厚さ1.7cmの丸瓦である。凸面は縦方向のヘラケズリの後ナデを加えてある。凹面は端部にヘラケズリを施し、布目痕の上から縦に4条の線が刻されており、玉縁裏面は未調整の部分が残る。色調は黒灰色を呈し、胎土は緻密である。(富村)

註

- (1) 松村降文・森屋直樹『東円寺跡発掘調査概要』1 熊取町教育委員会(1986)
- (2) 降井家は当地方の豪族で天保6年作成の屋敷図によれば台所、広間、書院、土蔵、厩などの巨大な邸宅を構え、射場、馬場まで備えていた。中でも書院は江戸時代豪族の生活の一端を窺うに足りるものである。昭和24年4月13日重要美術品に指定され、その後昭和27年3月29日重要文化財に指定された。
- (3) 竹原吉助・菅保『重要文化財降井家書院修理工事報告書』重要文化財降井家書院修理委員会(1977)

第4章 その他の調査

第1節 大浦中世墓地87年-1区の調査

大浦中世墓地87年-1区は町道五門久保小谷線の南側に位置する。小字名では牛神崎にあたる地点である。

調査は調査申請地内に長さ5m、巾1mのグリッドを設定し調査を実施した。

層序は上層より旧耕土、黄褐色粘上、黄橙色粘質土、暗褐色砂、灰褐色砂と堆積し地山に至る。砂層はおそらく大きな流路であると考えられる。遺物は弥生土器の破片を始め土師器などの破片が数点出土したがいずれも破片であるため図化することができない。今後さらに周辺で分布調査等を実施すればかなりの結果を得られると思われる。



第24図 大浦中世墓地位置図

第2節 久保城跡の調査

本年度久保城跡では国庫補助として2件の調査を実施したが、いずれも遺物包含層は存在せず遺物・遺構は検出されなかった。しかし国庫補助以外の調査では遺構、遺物が出土しており、今後は早急に範囲の確認を実施する必要がある。



第25図 久保城跡調査位置図

第5章 ま と め



調査風景(1)

本年度の調査の概要は前述のとおりである。本年度もまた新たな知見を多く得ることができた。東円寺跡 87年-1区・2区では奈良時代の掘立柱建物群が確認され多量の奈良時代の遺物と中世の土壇墓を検出することができた。

東円寺跡 87年 4区でも良好な遺物包含層が存在しており遺跡の範囲がさらに南西方向に広がる可能性も出てきた。

久保城跡では北は見出川を渡り国道170号線まで、西は八幡池まで範囲が拡大することを確認した。

その他に、大久保B遺跡では範囲の北東で縄文土器片が出土し、大浦中世墓地では弥生土器が出土した。また、本年度は、新たに口無池遺跡、大久保D遺跡の?ヶ所を周知の遺跡として加えた。

現在京南各市町では、関西新空港関連事業及びアクセス道路網の整備など大規模な開発が計画あるいは、実施されつつある。それにより、空港関連事業に直接関係しない熊取町でも、間接的にはあるが確実に影響を受け始めており、今後も更に発掘調査の件数は急増していくと予測される。それらに



調査風景(2)

対しての調査体制の充実と十分な配慮と周知の遺跡の範囲、規模の把握が必要である。また、こうした状況の中で発掘調査の殆どが行政によって行われている現在、国民の共有財産である文化財(遺跡)の保存・保護・活用についても

行政が果さなければならない役割は多いと思われる。

すべての人に文化財の存在とその価値を広く理解してもらうには、多くの人が活用しやすい形で提供することが必要である。例えば、「都市計画」に参画し、文化財の保護と活用として、遺跡・重要文化財・樹木などを含めた公園や緑地の整備を実施し、生活の場での町民の心のオアシスとして活用してもらう、これは「後追い行政」になりがちな文化財保護行政を、「都市計画」といった視点でとらえ、活用する一例であるが、生活環境の改善に大きく貢献するものと思われる。

以上本年度の調査状況及び今後の課題などについてとりまとめ記したが、最後に、先にも述べたとおり、今後もさらに文化財の保存と調査について、十分な配慮が必要であることを関係各位にお願いしておわりとしたい。（井田）

第2表 東円寺跡出土遺物観察表

図番号	種類・器種	法 量 (cm)	記 事	備 考
8-1	土師器 甕	反転口径: 16.8cm 残存高: 0.6cm以上	胎土 良好 焼成 還元炎焼成 色調 赤橙茶色	頸部、肩部
8-2	土師器 甕	反転口径: 20.5cm 残存高: 18.8cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 黒茶色	肩部、刷毛目、底部、刷毛目二方向
8-3	土師器 环	反転口径: 16.0cm 残存高: 2.8 cm以上	胎土 良好 焼成 還元炎焼成 色調 橙茶色	内面螺旋施 暗文
8-4	須恵器 杯	反転底径: 11.2cm 残存高: 2.9 cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡青灰色	
8-5	須恵器 杯	反転口径: 12.8cm 器 高: 3.65cm	胎土 良好 焼成 良好 色調 暗灰色	
8-6	須恵器 杯	反転口径: 12.6cm 残存高: 4.1cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡灰色	
8-7	須恵器 杯	反転口径: 14.4cm 残存高: 3.45cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡青灰色	
9-1	製塩土器	反転口径: 18.9cm 残存高: 4.6cm以上	胎土 粗1mm前後の白石粒含む 焼成 軟 色調 橙灰色	
9-2	製塩土器	反転口径: 11.6cm 残存高: 3.6cm以上	胎土 粗1mm前後の白石粒含む 焼成 軟 色調 橙灰色	
9-3	製塩土器	反転口径: 9.6cm 残存高: 6.7cm以上	胎土 粗1mm前後の白石粒含む 焼成 軟 色調 濃橙灰色	
9-4	製塩土器	反転底径: 1.9cm 残存高: 2.1cm以上	胎土 粗1mm前後の白石粒含む 焼成 軟 色調 濃橙灰色	
10-1	瓦器 塊	反転口径: 13.4cm 器 高: 3.45cm	胎土 良好 焼成 良好 色調 暗灰色	高台、貼り付け、 14世紀頃
10-2	土師器 小皿	反転口径: 8.0cm 器 高: 1.7cm	胎土 良好 焼成 良好 色調 金雲母を含む 白橙色	
10-3	土師器 小皿	反転口径: 8.1cm 器 高: 1.9cm	胎土 良好 焼成 良好 色調 金雲母を含む 白橙色	
10-4	土師器 小皿	反転口径: 8.55cm 器 高: 1.9cm	胎土 良好 焼成 良好 色調 金雲母を含む 白橙色	

図番号	種類・器種	法 量 (cm)	記 事	備 考
10-5	土師器 小皿	反転口径: 8.1cm 器 高 : 1.35cm以上	胎土 良好 金雲母を含む 焼成 良好 色調 白橙色	
10-6	土師器 小皿	反転口径: 8.1cm 器 高 : 1.8cm以上	胎土 良好 金雲母を含む 焼成 良好 色調 白橙色	
12-1	瓦質 甕	反転口径: 17.0cm 残存高 : 4.9cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 橙茶色	
12-2	東播系こね鉢	反転口径: 21.4cm 残存高 : 4.7cm以上	胎土 良好 0.5 mm~1.0 mm 焼成 良好 色調 灰緑色	
12-3	東播系こね鉢	反転口径: 22.9cm 残存高 : 3.1cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 暗灰色	
12-4	東播系 鉢	反転底径: 17.0cm 残存高 : 3.6cm以上	胎土 良好 1.0 mm前後の黒・白粒含む 焼成 良好 色調 灰白色	
12-5	須恵器 杯	反転底径: 9.0cm 残存高 : 2.5cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡暗灰色	
12-6	須恵器 甕	反転口径: 18.1cm 残存高 : 3.4cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 暗灰色	
12-7	瓦器 小皿	反転口径: 6.6cm 器 高 : 2.0cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 暗灰色	
12-8	瓦器 小皿	反転口径: 8.6cm 器 高 : 2.4cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 暗灰色	
12-9	瓦器 碗	反転口径: 12.2cm 残存高 : 2.7cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 黒灰色	
12-10	土師器 坏	反転口径: 17.9cm 残存高 : 3.9cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 橙茶色	
12-11	土師器 坏	反転口径: 20.0cm 残存高 : 3.4cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 橙茶色	
13-1	薄華文軒丸瓦	瓦当直径: 15.4cm 周縁の幅: 1.3cm	胎土 粗 0.3 ~2.0 mm白粒含む 焼成 良好 色調 褐色	
14-1	唐草文軒平瓦	瓦当の幅 (残存) 5.7cm以上	胎土 良好 焼成 軟 二次焼成か? 色調 淡赤褐色	
14-2	唐草文軒平瓦	瓦当の幅 (残存) 3.6cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 灰白色	

図番号	種類・器種	法 量 (cm)	記 事	備 考
14-3	唐草文軒平瓦	瓦当の幅 (残存) 4.5cm以上	胎土 良好 焼成 軟 二次焼成か? 色調 褐灰色	
14-4	丸 瓦	残存長軸: 10.1cm以上 残存短軸: 9.5cm以上	胎土 密 焼成 やや軟 色調 乳白色	
14-5	丸 瓦	残存長軸: 17.5cm以上 残存短軸: 8.9cm以上	胎土 密 焼成 良好 色調 灰白色	
14-6	丸 瓦	残存長軸: 8.9cm以上 残存短軸: 8.9cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡茶褐色	
15-1	平 瓦	残存長軸: 15.1cm以上 残存短軸: 11.5cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡赤褐色	
15-2	平 瓦	残存長軸: 15.5cm以上 残存短軸: 12.7cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡赤褐色	
15-3	平 瓦	残存長軸: 14.3cm以上 残存短軸: 8.6cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 赤褐色	
15-4	平 瓦	残存長軸: 12.2cm以上 残存短軸: 8.4cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 青灰色	
15-5	平 瓦	残存長軸: 10.5cm以上 残存短軸: 8.7cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 暗灰色	
15-6	平 瓦	残存長軸: 10.4cm以上 残存短軸: 6.4cm以上	胎土 粗 焼成 良好 色調 赤褐色	

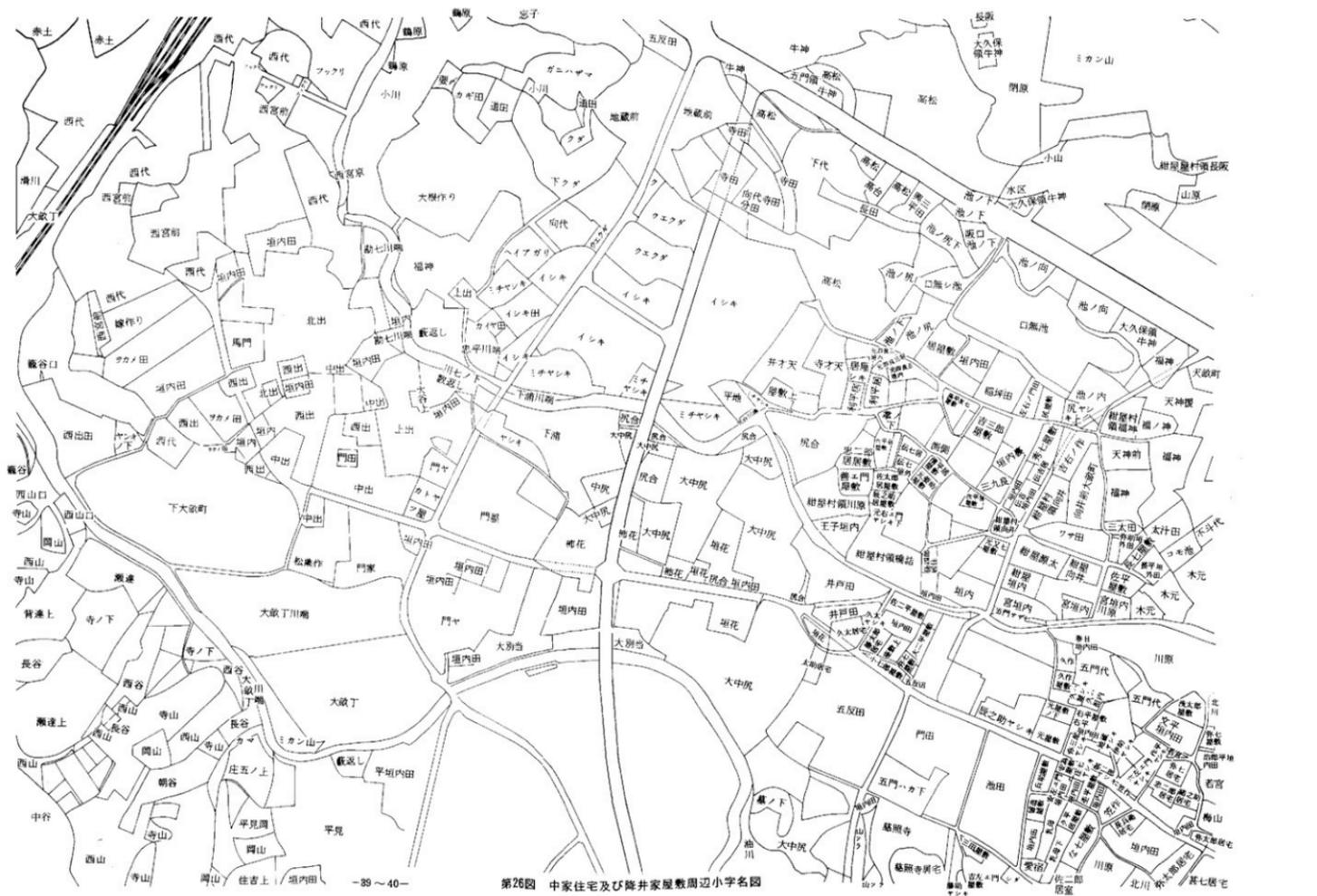
第3表 降井家屋敷跡出土遺物観察表

図番号	種類・器種	法 量 (cm)	記 事	備 考
19-1	伊万里焼染付 碗	反転口径: 10.0cm 残存高: 3.2cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡青灰色	見込み蛇 の日に袖 かきとり
19-2	唐津焼 碗	反転口径: 14.9cm 残存高: 3.7cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
19-3	伊万里焼染付 皿	反転底径: 8.4cm 残存高: 4.0cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡青灰色	外面唐草 文
19-4	唐津焼 鉢	反転底径: 6.6cm 残存高: 2.5cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調	

図番号	種類・器種	法 量 (cm)	記 事	備 考
19-5	唐津焼 鉢	反転底径 : 20.1cm 残存高 : 3.7cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 暗黒褐色	
19-6	伊万里焼染付碗	反転底径 : 3.1cm 残存高 : 2.7cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡青灰色	外面草花文
19-7	伊万里焼染付碗	反転底径 : 4.4cm 残存高 : 2.4cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 灰白色	見込み蛇の目に軸かきとり
19-8	伊万里焼染付碗	反転底径 : 4.2cm 残存高 : 1.8cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡青灰色	"
19-9	青磁 花瓶	反転底径 : 4.9cm 残存高 : 13.1cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 明灰緑色	
19-10	伊万里焼染付碗	反転底径 : 4.4cm 残存高 : 2.1cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 灰緑白色	
19-11	伊万里焼染付碗	反転底径 : 4.5cm 残存高 : 1.8cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡緑灰色	見込み蛇の目に軸かきとり
19-12	伊万里焼染付碗	反転底径 : 4.3cm 残存高 : 3.3cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡青灰色	"
19-13	伊万里焼染付碗	反転底径 : 4.6cm 残存高 : 3.9cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡青灰色	
19-14	伊万里焼染付碗	反転口径 : 11.0cm 器 高 : 6.1cm	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡青灰色	見込み蛇の目に軸かきとり
19-15	花瓶	反転底径 : 4.4cm 残存高 : 2.3cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡青灰色	
19-16	赤絵 花瓶	反転底径 : 4.9cm 残存高 : 5.1cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡緑灰色	
19-17	堺漆焼 すりばち	反転口径 : 31.0cm 残存高 : 9.6cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 赤褐色	
19-18	備前 壺	反転底径 : 25.0cm 残存高 : 8.2cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 暗茶褐色	
20-1	染付 碗	反転口径 : 9.0cm 器 高 : 4.9cm	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡青灰色	外面に山水文
20-2	染付 皿	反転口径 : 10.6cm 器 高 : 2.5cm	胎土 良好 焼成 良好 色調	外面に花卉文

図番号	種類・器種	法 量 (cm)	記 事	備 考
20-3	伊万里焼染付 皿	反転口径: 13.8cm 器 高 : 4.7cm	胎土 良好 焼成 良好 色調 青灰色	高台に滿 福文 みこみに 五弁花文
20-4	染付 皿	反転底径: 3.8cm 残存高 : 1.6cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 淡緑灰色	蛇の目凹 型高台
20-5	伊万里焼染付 小皿	反転口径: 8.7cm 器 高 : 2.4cm	胎土 良好 焼成 良好 色調 灰白色	
20-6	瀬戸 陶胎染付	反転口径: 26.0cm 器 高 : 3.2cm	胎土 良好 焼成 良好 色調 灰黄色	呉須の色 が薄い
21-1	巴文軒丸瓦	瓦当直径: 17.8cm 周縁の幅: 2.2cm	胎土 良好 焼成 良好 色調 黒灰色	
21-2	巴文軒丸瓦	瓦当直径: 13.5cm 周縁の幅: 1.6cm	胎土 密 焼成 良好 色調 黒灰色	
21-3	巴文軒丸瓦	瓦当直径: 12.6cm 周縁の幅: 1.4cm	胎土 粗 焼成 軟 色調 黄灰色	
21-4	巴文軒丸瓦	瓦当直径: 12.6cm 周縁の幅: 1.9cm	胎土 粗 焼成 良好 色調 暗灰色	
21-5	巴文軒丸瓦	瓦当直径: 15.1cm 周縁の幅: 1.7cm	胎土 粗 焼成 軟 色調 茶灰白色	
21-6	唐草文軒平瓦	瓦当の幅 (残存) 3.3cm以上	胎土 密 焼成 良好 色調 暗灰色	
21-7	唐草文軒平瓦	瓦当の幅 (残存) 3.1cm以上	胎土 粗 焼成 軟 色調 灰白色	
21-8	唐草文軒平瓦	瓦当の幅 (残存) 3.3cm以上	胎土 粗 焼成 軟 色調 黒灰色	
21-9	丸 瓦	残存長軸: 9.5cm以上 残存短軸: 9.2cm以上	胎土 密 焼成 軟 色調 暗黄灰色	
21-10	丸 瓦	残存長軸: 12.3cm以上 残存短軸: 7.0cm以上	胎土 密 焼成 軟 色調 黒灰色	
22-1	巴文軒丸瓦	瓦当直径: 13.6cm 周縁の幅: 1.6cm	胎土 粗 焼成 良好 色調 黒灰色	

図番号	種類・器種	法 量 (cm)	記 事	備 考
23-1	丸 瓦	残存長軸：13.3cm以上 残存短軸：11.4cm以上	胎土 良好 焼成 良好 色調 暗黄灰色	
23-2	丸 瓦	長 軸：21.1cm 短 軸：13.3cm 上	胎土 焼成 良好 色調 黒灰色	



第26図 中家住宅及び降井家屋敷周辺小学名図

第4表 熊取町遺跡群 周知の遺跡一覧表

No.	遺 跡 名	種 類	時 代	そ の 他
1	降井家書院	書 院 跡	室町～江戸時代	国指定 重要文化財
2	中家住宅	屋 敷 跡	室町～江戸時代	国指定 重要文化財
3	末迎寺本堂	寺 院	鎌倉時代	国指定 重要文化財
4	池ノ谷遺跡	旧石器散布地	旧石器時代	
5	甲田家住宅	民 家	江戸時代	
6	東円寺跡	寺 院 跡	弥生～江戸時代	平安末期の創建
7	城ノ下遺跡	城 郭 跡	室町時代	
8	成合寺遺跡	墓 地	室町時代	
9	高蔵寺城跡	城 郭 跡	室町時代	高倉寺城ともいう
10	雨山城跡	城 郭 跡	鎌倉時代	
11	五門遺跡	散 布 地	古墳～江戸時代	
12	五門北古墳	古墳参考地	古墳時代	
13	五門古墳	古墳参考地	古墳時代	
14	大浦中世墓地	墓 地	室町時代	
15	久保城跡	城 郭 跡	鎌倉時代	
16	山ノ下城跡	城郭参考地	鎌倉時代	
17	大谷池遺跡	散 布 地	古墳～江戸時代	
18	祭礼御旅所跡	祭 礼 跡	室町時代	
19	正法寺跡	寺 院 跡	鎌倉時代	
20	小垣内遺跡	寺 院 跡	江戸時代	小垣内毘沙門堂跡
21	金剛法寺跡	寺 院 跡	室町時代	
22	烏羽殿城跡	城 郭 跡	室町時代	
23	墓ノ谷遺跡	寺 院 跡	室町時代	
24	花成寺跡	寺 院 跡	室町時代	華成寺ともいわれる
25	降井家屋敷跡	屋 敷 跡	室町～江戸時代	
26	大久保A遺跡	散 布 地	江戸時代	

No.	遺 跡 名	種 類	時 代	そ の 他
27	下高田遺跡	条 里 跡	鎌倉時代	
28	大久保B遺跡	集 落 跡	弥生～江戸時代	
29	紺屋遺跡	散 布 地	古墳～江戸時代	
30	白地谷遺跡	散 布 地	室町～江戸時代	
31	大久保C遺跡	散 布 地	室町～江戸時代	
32	千石堀城跡	城 郭 跡	室町時代	
33	口無池遺跡	散 布 地	平安～江戸時代	
34	大久保D遺跡	散 布 地	鎌倉～江戸時代	

※この一覧表は昭和61年4月1日大阪府教育委員会発行の文化財分布図に従って作成されています。

※昭和61年4月以降の周知の遺跡の加増及び範囲の拡大は文化庁長官宛の遺跡発見届に基づいています。

※この一覧表は昭和63年3月31日現在のものです。

※町内の溜池はすべて周知の遺跡と同等の扱いとなります。

※水田は一部条里遺構を残しているので周知の遺跡と同等の扱いとなります。

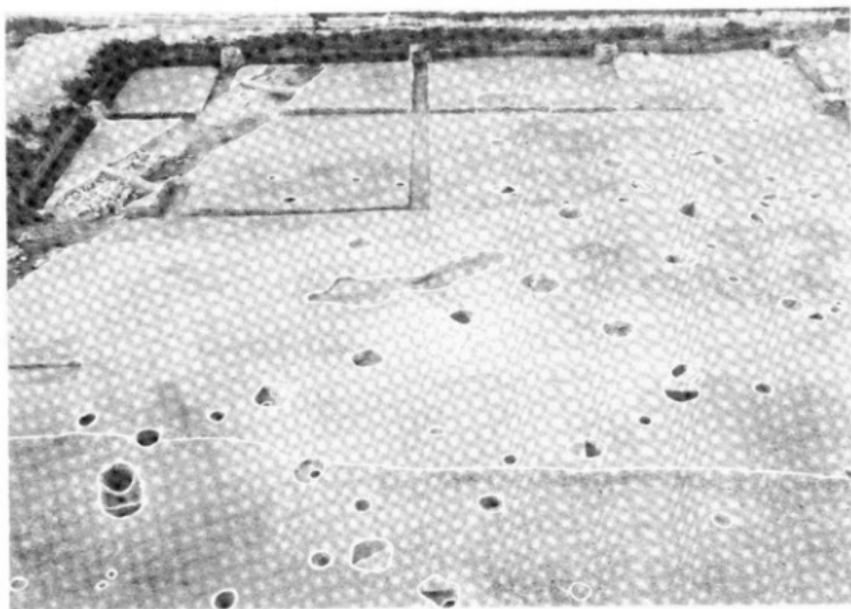
※旧街道も周知の遺跡と同等の扱いとなります。



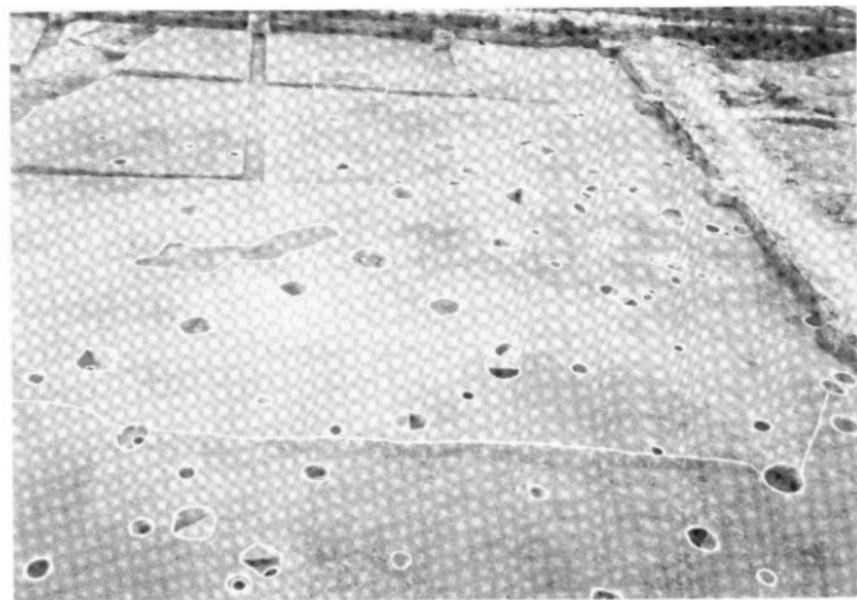
第 27 図 熊取町遺跡分布図

圖

版



南から北 溝SD-1掘立柱建物SB-1.2



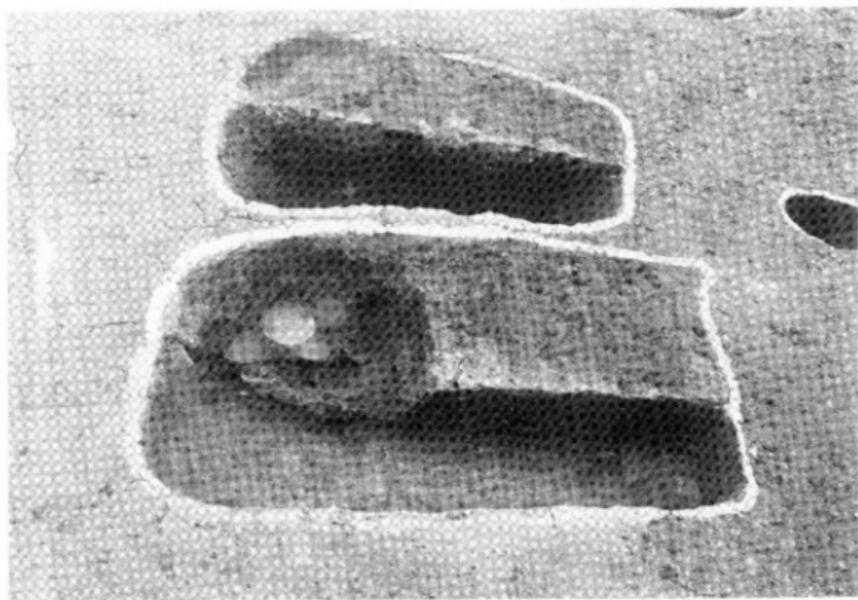
南から北 溝SD-1掘立柱建物SB-1.2



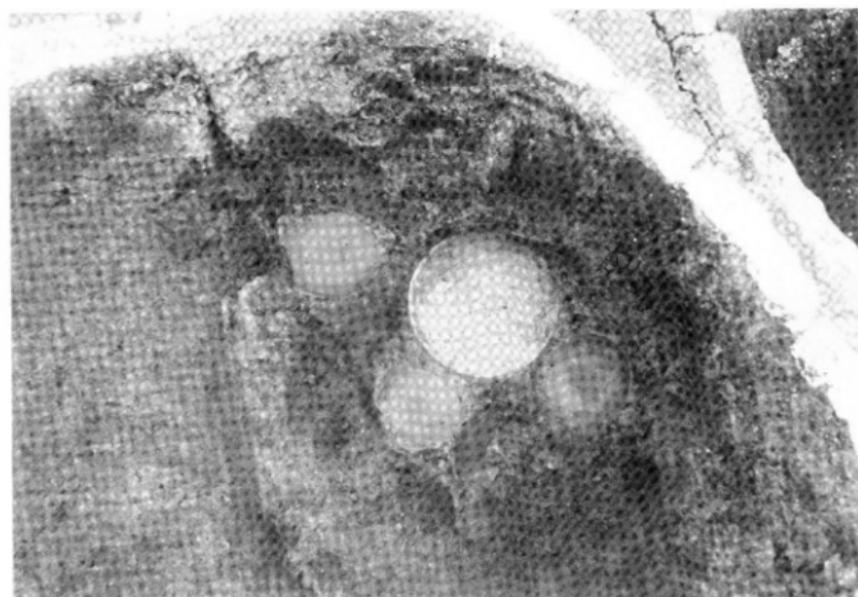
溝 SD-1 検出状態 北東より南西方向を望む



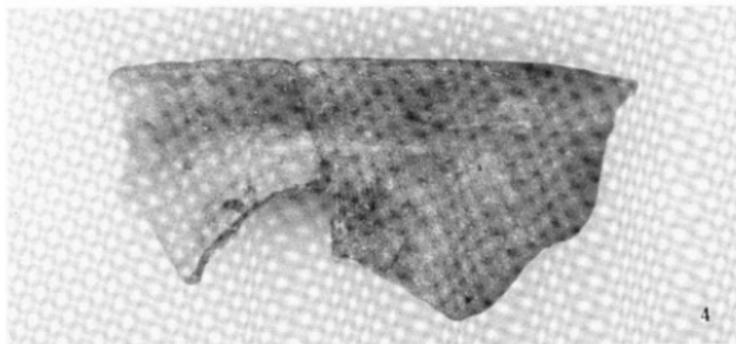
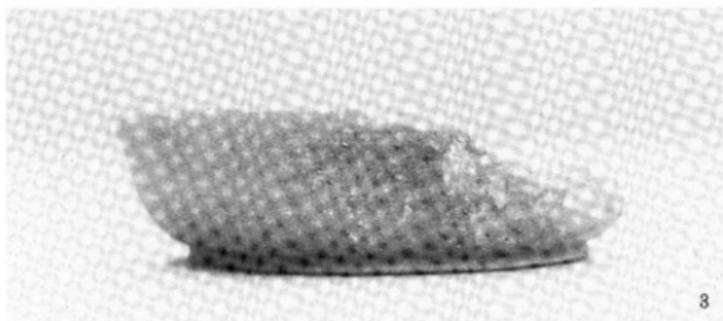
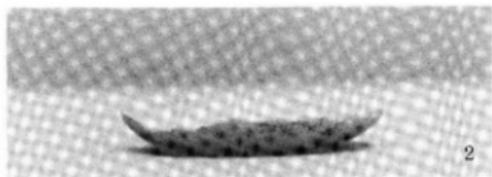
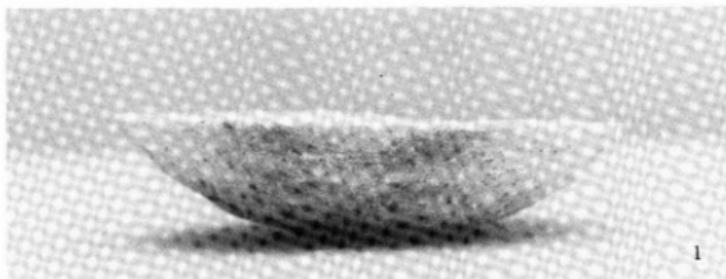
溝 SD-1 検出状態 南西より北東方向を望む

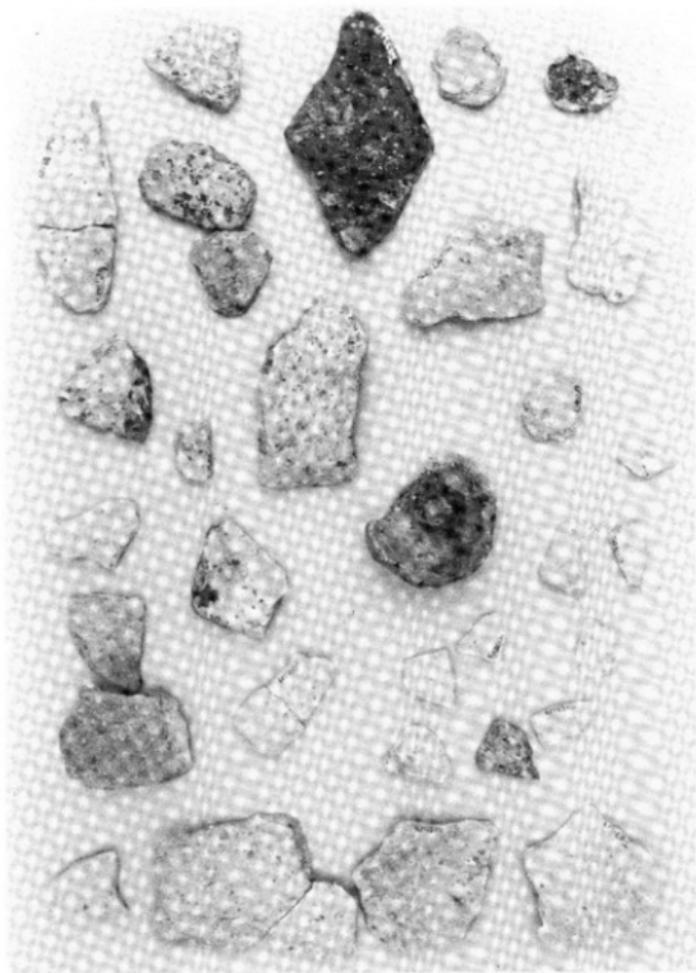


土壙墓 ST-1 検出状態



土壙墓 ST-1 遺物出土状況





製埴土器

